朝日新聞　1979年（昭和54年）2月5日　月曜日　12版　国際　（6）

あんぐる79

訪米した中国の鄧小平副首相が「反ソ統一戦線」を呼びかけ、中ソ対立のミゾはさらに深まっている。ベトナムとポル・ポト政権派のカンボジアとの対立、中越国境の緊迫も続く。東欧では、自主独立派のルーマニアは、中国に接近しつつ、ソ連の圧力をけん制している。また、中国と長い間盟友関係にあったアルバニアは中国との離別を宣言している。一九五六年二月、ソ連共産党第二十回大会で行われたスターリン批判は、社会主義陣営のヒビ割れ、国際共産主義運動の多極化の重要な起点だった。そして、五〇年代末から六〇年代初めにかけて、中ソ対立が表面化した。あの時から四半世紀近くたつ。社会主義陣営は今、多様化と多極化に向かってさらに進もうとしている。昨年から今年初めにかけて、噴き出てきた社会主義国同士の相克の現状と背景、対立の中でもなお保ち続ける経済交流の意味などをさぐった。

世界に緊張を生む

中国対ソ連

一月二十一日の北京放送によると、七八年は「モスクワの反中国宣伝の量が記録をつくった年」で、ソ連発行の主要二十紙誌に掲載された反中国の論文、報道は千四百余編に達した、という。おそらく中国からの反ソ・キャンペーンもそれに匹敵したとみてよいだろう。昨年八月の華国鋒主席によるルーマニア、ユーゴスラビア訪問をはじめ、日中条約締結、米中正常化、ベトナム・カンボジア紛争、と中ソの争いはエスカレートする一方だ。中ソ対立はいまや世界に緊張を生む大きな要因になっている。

今年の正月、北京で「中国人権宣言」が壁新聞として張り出された。その第八条は「中ソ間にはイデオロギー面での対立、抗争が存在する客観的基礎は完全になくなった」と述べ、政府に対してソ連との交渉を求めている。かつて、米国との平和共存を唱えたフルシチョフ路線を「修正主義」と決めつけて公然化した中ソ対立であるから、中国が米国と手を結んだいま、このたぐいの、素朴な主張が出てくるのは当然ともいえよう。

現段階での中ソ対立を理解するには、単一の要因だけでとらえるのは誤りだという見方が多い。例えば、①民族的対立②国家的対立③イデオロギー的対立④政府間の対立、といった諸要因が重層的に一体化している、というとらえ方がある（中嶋嶺雄「中ソ対立と現代」）。また、パワー・ポリティックス（権力政治）に視点を据えて、互いが世界の大国になろうとする争いとの見方もある。ヨーロッパとアジアが接する数千キロの国境で、四十万（ソ連）と百二十六万（中国）の兵力がにらみ合う姿は、イデオロギー対立より根深い、ナショナリズムを感じさせる。

地政学的な宿命

ソ連対ルーマニア

自主独立路線を掲げるルーマニアがソ連の指導方針に反旗を翻すのは、いまに始まったことではない。六二、三年には、経済相互援助会議（コメコン）諸国内の国際分業化をめぐってソ連と対立、六八年には、ソ連のチェコ軍事介入を非難するなど、ときに大胆な行動をとってきた。

昨年十一月のワルシャワ条約機構首脳会議で軍事費引き上げ問題をめぐって、ルーマニアはソ連に異を唱えた。しかし、ブレジネフ書記長とは一月三十日、国機構書記長ビーチをしている。ソ連対立の存在は無視できないが、対決は避ける」スク・ルーマニア大統領は、ソ連との関係を示したものといえよう。

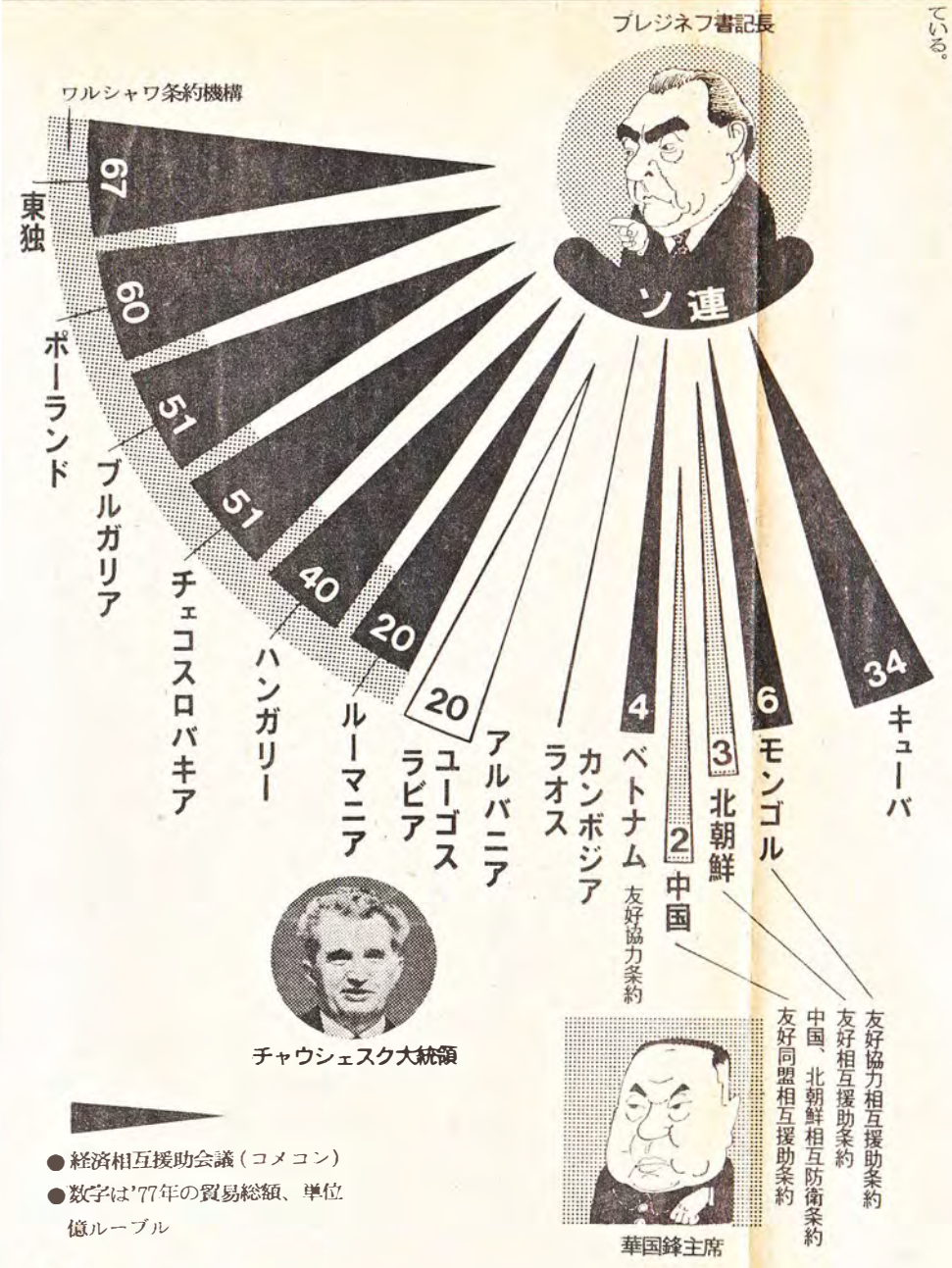
ルーマニアとソ連との関係の底にあるのは、地政学的な側面がある。ルーマニアはソ連と国境を接し、累積赤字三十億ドルとされるルーマニア経済の不調から、ソ連の資源の不足。海外旅行の権にからむ国民の要求

影落とす中

ベトナム対カンボジア

カンボジア救国民族統一戦線の登場からプノンペン制圧、そしてポル・ポト派の巻き返しの動き——米国相手のベトナム戦争当時、カンボジアとベトナムは、たった兄弟的連帯感があった。ヘン・サムリン政権を、ソ連、ワルシャワ条約機構の支援を受けたベトナムが結果的に、と非難する。これに対してベトナムは、までも「カンボジア人民の

ヒビ割れ進む社会主義陣営



経済協力だけは

党・国家関係が最ち込み、激しく非難している時も、社会主経済協力だけは、き、しかも、次第に